日曜日の恐怖・拳銃(前編)

竹冠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日曜日の恐怖・拳銃（前編）

【Ｎコード】
Ｎ３７９２Ｑ

【作者名】
竹冠

【あらすじ】
ねぇドラえもん。君は壊れちゃったのかい？

（前書き）

黒光りする凶器を手に、青い悪魔が悲劇を巻き起こす。

いつもと変わらない週末。その日は本当に清々しい青空が広がっていた。
その空の下、平凡な毎日をぶち壊す輩の魔の手が、野比家に迫っていることなど、誰一人として考えていなかった。

「ドラえもーん！またジャイアンにいじめられたよ、なんか喧嘩強くなれる道具だしてよー！」
そう喚きながらのび太は自分の部屋へと駆け込む。が、そこにドラえもんの姿はない。
「あれ？ドラえもん？」
とりあえず押し入れを探すが、そこにもドラえもんの姿はない。おかしいな、と呟きながら机の引き出しを開こうとした。その時、
カチリ、
のび太の後ろで固い音。
「さよならのび太君。」
ドンッ
かわいた銃声。
「うーふーふーふー。」湿ったドラの笑い声。
カラン、と空の薬莢がドラの足元に落ちる。そのすぐ近くにはのび太。
本日一人目の被害者。

ドラは格好をつけて、まだ煙の出ている拳銃の銃口に、ふっ、と息を吹き掛ける。ちなみに片方の手は腰に当て、視線は斜め上、四十五度。
「次はママだー。うーふーふーふー。」

のび太と空の薬莢をそのままにして、ドラはのび太の部屋を出た。
その足取りは酔っ払いの千鳥足そのもの。
明らかに危ない。
その足取りのまま、階段を降りる。
否、一段目を踏み外してそのまま一番下まで激しく転がり落ちる。
人間ならば鼻血は出していてもおかしくない。が、あいにくドラはロボットなので、あちこち汚れただけだった。
「うーふーふー。」
痛いとか汚れたとか、今のドラはそんなことは全く気にしない。わざわざ玄関のほうに身体を向け、勢い良く台所のほうへ顔を向ける。いちいち格好つけすぎだ。
身体も台所のほうへ向けると、壁に張りつきながら歩きだす。怪しい。

台所のドアを、なるべく音をたてないように開け、侵入。ママはテーブルの上に朝刊を広げている。
その背後にゴキブリのように忍び寄り、
カチリ、ママの背後で固い音。
「さよならママー。」
ドンッ
かわいた銃声。
「うーふーふーふー。」
ドラの湿った笑い声。
ママの読んでいた新聞紙の上には空の薬莢。
本日二人目の被害者。

再びドラは煙の出ている銃口に向け、息をふっと吹き掛ける。
「うーふーふーふー。次はパパだー。」
湿った笑い声を廊下に響かせながら、居間へと向かう。障子をそっと開くが、そこには誰もいなかった。

ドラはしばらく腕を組んで首を傾げた。が、しばらくして何かを思い出した。
「今日はパパはゴルフに行ってるんだー。うーふーふー。」
これももちろん独り言。

ぺ〇ちゃんのように舌を出しながら、自分の腹にくっついているポケットを探る。目は危ない目のまま。
「どこでもドアー！」
いつものＢＧＭ。
そして、いつものようにドアを開ける。
危ない足取りのドラの片手には、二回使った拳銃。
同じ頃、パパは会社の仲間と離れたところで、一人煙草をふかしていた。
一人であったのは、運が悪すぎた。
まさか自分の身に、悲劇が起きようなどとは思ってもいなかっただろう。

「あ、ドラえもん！」
パパがドラに気付く。が、その様子がおかしいことには気付かなかった。
パパが不審がらなかったのをいいことに、ドラは調子に乗って、スキップをしながらパパに近づく。
そして、
「あ、ＵＦＯー。」
などと抜かしながら上空を指差す。もちろんそんなものはない。
が、
「え？どこどこ？」
人の善いパパは、その言葉を信じてドラの指差す空を見上げた。
カチリ、
「あそこだよー。」

「えー？どこー？」
ドラは引き金をゆっくりと引く。
一一そして、
ドンッ
「さよならパパー。うーふーふーふー。」
ドラの足元には空の薬莢とパパの吸っていた、まだ煙の出ている煙草。
本日三人目の被害者。
またドラは腰に手を当て格好をつける。
しばらくの静寂。ウグイスがどこかで鳴いている。
「次は静ちゃんだー、うーふーふーふー。」
ドラはそう言うと、拳銃をポケットにしまい、再びどこでもドアを探す。
どうやらこの連続殺人犯は、被害者を野比家のみにとどめる気はないらしい。
「（さっきよりも明るい声で）どこでもドアー！」
いつものＢＧＭ。
ドラは元気にどこでもドアを出した。
そして、ドアを開けた。
源家。しずかちゃんは出来杉と一緒に勉強している。そこへ、

「うーふーふーふー。」
奴がやってきた。
どこでもドアをポケットにしまうドラを見て、しずかちゃんはいつもどおり声をかけた。
「あら、ドラちゃん。のび太さんは？」
「お昼寝中だよ、うーふーふーふー。」
違う、昼寝どころか永眠だ。が、しずかちゃんは
「あら、そう。」と言って大して気にしない。
「あ、ドラえもん、ここの問題わかる？」

出来杉がドラに尋ねる。
「どれどれ、うーふーふー。」
二人の後ろにドラが移動した。二人に見えないよう、背中には二丁の拳銃が握られている。ちなみに両方、サイレンサーつき。
「ここはねー。」
「うん。」シャコッ
「ここがねー。」
「うん。」
カチリ、
「こうなるんだよー。」
「なるほど！」パシュッ
本日の被害者、四人目、五人目。連続殺人だ。
「うーふーふー。さようならしずかちゃん、さようなら出来杉君ー。」
ドラは言いながら、今落ちた空の薬莢を拾った。
そして拳銃をポケットにしまい、
「どこでもドアー！」
いつものＢＧＭ。
「次はスネ夫だー。うーふーふー。」

ドアに手をかけ、いつもとさほど変わりのない仕草で、ドアの向こうへ消えていった。

（後書き）

昔落書きしたドラえもんの目が危なかったんですよね。

後編はクライマックスであのキャラが…！

期待しないのは大正解です。

有り難うございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3792q/

日曜日の恐怖・拳銃(前編)

2011年1月28日15時00分発行